


# 縄文時代におけるマメ栽培化過程の解明 — 縄文時代の食物革命

明治大学提供  
作成日 2016年2月26日  
更新日

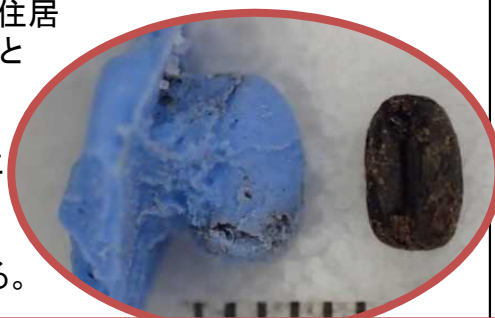
 <p>縄文時代中期最盛期土器</p>	<b>研究代表者氏名</b> あいだ すすむ <b>会田 進</b>	<b>所属機関</b> 明治大学研究・知財戦略機構	<b>関連キーワード（複数可）</b> 日本考古学 植物考古学 レプリカ法 水洗選別法 実験考古学
	<b>主な研究テーマ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>縄文土器種実圧痕のレプリカ法による研究</li> <li>縄文時代土壌の水洗選別による炭化種実の研究</li> <li>縄文時代におけるマメ栽培化過程の解明</li> </ul>		<b>主な採択課題</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>基盤研究（B）平成25～28年度（配分総額：17,420千円）                      課題名「中部山岳地縄文時代におけるマメ栽培化過程の解明」</li> </ul>

## ① 科研費による研究成果

**研究の動機** 世界最古とされる縄文土器によって、人類の食物史は大きく変わったと考えられている。縄文文化最盛期の中期には原始芸術として世界的に評価の高い豪壮な縄文土器が中部山岳地域を中心につくられるが、その背景には食物事情に革命的な変化があったのではないかと、縄文文化の本質を明らかにするためにも植物考古学から解明する必要があった。

**縄文農耕論へのアプローチ** 長野県内から出土した縄文時代中期を中心とする土器の種実圧痕調査をレプリカ法を用いて行い、マメ類（ダイズ属やアズキ亜属）やシソ属（エゴマ）などの圧痕を複数遺跡で発見した。同時に、堅穴住居址の炉内の土壌を水洗し、多量の炭化マメを発見した。

**縄文時代にマメあり！** 山間地の遺跡の住居や土器の器壁にマメ類等が混入しているということは、縄文の植物質食生活の実態に直接迫ることができる。食物であるマメ類等が、縄文時代の日常生活の中に恒常的にあったことがわかった。マメ類は縄文中期頃に大型化しており、野生の植物の栽培化を進めていた可能性がある。



土器器壁中の炭化マメとその圧痕レプリカ

### 研究成果

大型のマメ炭化種子の発見



土器中の大量のマメ圧痕



縄文人のマメの栽培化？！

## ② 当初予想していなかった意外な展開

**いくらでもある成果** 水洗選別による炭化マメの発見は予想外の大きな成果であった。また土器の種実圧痕の発見率は西日本に比べ10倍と、大きな成果をあげることができた。

**多量のマメの存在** 1個体の土器に100粒以上のマメや、1000粒以上の多量のエゴマが混入される例を発見した。なぜ、土器をつくる粘土に種子を混入するのか、栽培化を考える契機となった。



ダイズ属炭化種子

## ③ 今後期待される波及効果、社会への還元

**縄文は日本の基層文化** 日本の農耕文化は、栽培作物がすべて大陸から伝播したとする考えを再考しなければならない。世界史上最も優秀な狩猟・採集民といわれる縄文人は、植物質食物の栽培化をはかっていたことを明らかにしていく。

**縄文時代観の変革** この研究によって、従来の縄文時代観を変え、日本の固有の基層文化である縄文文化に対する尊厳を育み、誇りを培うことができると考える。